

『官話急就篇』『急就篇』訳述書4種の日本語
—近代日本語資料としての性質と活用法について—

園 田 博 文

地域教育文化学部 地域教育文化学科

山形大学紀要（教育科学）第16巻第4号別刷

平成29年（2017）2月

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。

『官話急就篇』『急就篇』訳述書4種の日本語 —近代日本語資料としての性質と活用法について—

園田博文

地域教育文化学部

(平成28年11月15日受理)

要 旨

「中国語関係書」は、慶応3(1867)年から昭和20(1945)年までに1437種刊行されている。その中でも先行研究により重要度が高いとされる『官話急就篇』および『急就篇』を扱った。この訳述書は大正5年から昭和9年までに4種刊行されているため、近代日本語資料としての性質について考察するのに適している。書誌的事項を確認し、訳述方針や著者の略歴等を詳細に見ることにより、その性質が明らかになった。待遇表現のバリエーションを含む訳文のバリエーションが本文と割注というような形で優先順位を付けられ示されていることから、日中対照の中での多様な日本語の姿が窺える。ワア行五段動詞連用形の音便の例からは、訳述方針や中国語の原文にとらわれない日本語の揺れの一端が認められた。人称代名詞、中でも二人称代名詞に関しては、杉本『官総訳』のように訳述方針通り読者に読みの判断が委ねられる例が見られた。その一方で、宮島『急総訳』のように「直訳度」の低い場合も見られた。近代日本語資料としての活用法としては、揺れのある表現についてその一端を明らかにできることが挙げられる。

1 はじめに

近年、中国語会話書の基礎的な研究が盛んになってきている。ただ、内田・氷野(2016)等中国語学あるいは中国語教育の視点からの研究が主であり、近代日本語資料としての価値については、あまり論じられていない。

六角(2001)によると、「中国語関係書」は、慶応3(1867)年から昭和20(1945)年までに1437種、昭和21(1946)年から平成12(2000)年までに1113種刊行されている。「中国語関係書」は「学習書」「時文・尺牘」「語彙・辞典」等に細分されるが、明確な境界があるわけではなく、連続的なものである。本稿でいう中国語会話書は、「中国語関係書」のうち、会話学習に関する例文集が載っているものを指す。

このように中国語会話書を含む「中国語関係書」は多数刊行されているが、「それら大半は『官話指南』や『談論新篇』そして『急就篇』の形式や内容を模したものといっても、過言ではない」(六角1994)という。先行研究でも一編一編詳細に確認しているわけではないが、このように言われるのには理由がある。園田(2016)では、『官話指南』の訳述書

である『官話指南総訳』の日本語について論じた。『官話指南総訳』は明治38年刊行である。『談論新篇』の訳述書については後日論じる予定である。

本稿では、『官話急就篇』および『急就篇』の訳述書4種（大正5年から昭和9年までに刊行）を資料とし、訳述方針や著者の略歴等基礎的な事柄の確認を行った上で、近代日本語資料として見た場合の性質やその活用法について考える。意識できる項目は訳述方針通りになっているであろうが、無意識的なものは訳述方針と関わりなく現れると予想され、近代日本語の一端を明らかにできるのではないかと考える。訳文のバリエーションと優先順位、待遇表現のバリエーション、ワア行五段動詞連用形の音便、人称代名詞を手がかりにして見ていく。

2 『官話急就篇』『急就篇』の書誌

2.1 『官話急就篇』（明治37年刊）について

著者は、山形（米沢）生まれ東京育ちの宮島大八である。明治37年8月、善隣書院発行で、全文中国語である。書名の「官話」は角書になっている。

「この『官話急就篇』は、宮島大八が明治二〇年から二七年まで張裕釗（号を廉卿）に就いて学ぶ間に体験し見聞した中国語が基礎となって編輯されたものと考えられる。そのため当時としては現実の活きた中国語といえよう」（六角 1994）という。

『官話急就篇』初版は、国会図書館蔵本が知られており、本稿でも参照した。板垣（2013）によると、同書は、明治39年9月の増訂四版で初版から大きく構成等が変わったことが実証されている。『官話急就篇』は、昭和8年『急就篇』に改訂されるまで、126版を重ねた。

2.2 『急就篇』（昭和8年刊）について

昭和8年10月、善隣書院発行。『官話急就篇』の改訂版であり、改訂者は『官話急就篇』の著者と同じ宮島大八である。『急就篇』は、「昭和20年10月に改訂71版が発行され、この時点で改訂版が2万部刊行されている」という（六角 1992）。『急就篇』の影響は大きかったようで、『続急就篇』も宮島大八により昭和16年に発行されている。『急就篇』は昭和23年2月に重訂初版が刊行され、戦後も引き続き使われた。

六角（1992）には、『官話急就篇』から『急就篇』への変更点が記されている。「概して古いものを新しい語句や単語に入れかえた。例えば『兵船』が『軍艦』となり、『今児幾児了 今児初十』が『今天幾号了 今天十号』のように改まっている」という（六角 1992）。

3 『官話急就篇総訳』（杉本吉五郎）（大正5年刊）について

3.1 『官話急就篇総訳』の書誌

書誌について挙げると以下の通りである。

- ・もととなった書：『官話急就篇』（増訂四版以降）
- ・書名：官話急就篇総訳（杉本『官総訳』と略記する）
- ・編輯者・著者（訳者）：杉本吉五郎
- ・刊年：大正5年7月

- ・発行：満書堂書籍部
- ・発行地：大連市
- ・自序識年：大正5年6月
- ・自序識地：旅順

構成は以下の通りである。

- ・自序・例言・目次
- ・名辞・問答之上・問答之中・問答之下
- ・散語・附（家庭常話～応酬須知）

3.2 『官話急就篇総訳』の例言からみる訳述方針

漢文による自序の後、以下の例言が記される。

〈例言〉

一、本書ハ予ガ往年記憶ニ利シ暗誦ニ便センガ為時ニ随テ訳録シタルモノニ係ル今茲ニ梓ニ上ス所以ノモノハ

従来世ニ行ハルル所ノ教科書ニシテ常ニ総訳ノ印行セラレザルモノ尠シ若シ夫レ急就篇ニシテ総訳ノ印行セラルルモノアランカ以テ初学ヲ益スル決シテ尠少ナラザルベキノミナラズ又以テ斯学普及ノ一助タルヲ得ヘキヲ信ジタルニ依ルト雖更ニ本印行ヲ断行セシメタル所以ノモノハ

同胞ノ出デテ支那ニ在ルノ士ニシテ至ル所其ノ国人ニ師事シ急就篇ヲ誦読スルモノ甚ダ多シ然ドモ此等ハ其ノ声音ヲ学ブニ利便多キモ其ノ意義ノ講究ニ至リテハ常ニ隔靴搔癢ノ感ナキ能ハザルノミナラズ其ノ労徒ラニ大ニシテ其ノ功殆ンド及ブベカラザルノ嘆アリ此ノ嘆ヲ補ハンガ為ニハ一ニ適當ナル総訳ヲ印行シテ学者ノ同伴タラシムルニ如カザルベキニ想到シタルニ在リトス

即チ茲ニ同学ノ士ノ勸メニ聴キ敢テコレヲ訳述シ自カラコレヲ初學者ノ左右ニ薦ム而カモ一言スベキモノアリ本総訳ニ依リテ意義ヲ講ズルノ前請フ先ヅ本書（急就篇）ニ就テ熟読玩味シ更ラニ本書ノ訳義ト対照セラレンコトヲ

二、書中名辞ノ訳語ハ可成日常普通ノ用語ニ拠リタルモ而カモ彼ニ在リテ我ニ無キモノアリ此等ハ訳語ヲ加ヘズ只ダ註解ヲ施スニ留メタルモノアリ又固有ノ名辞ニシテ別ニ加註セズ其ノ儘コレヲ掲ゲタルモノアリ又你（左ルビ：オマイ、又ハキミ）ハ同輩間又ハ同輩以下ノ対称代名詞ニシテ您（左ルビ：アナタ）ハ尊輩ニ対する称呼ナリト解スルヲ一般ノ例トスルモ場合ニ依リテ必ズシモ同一ナラザルモノアルヲ以テ此等ハ都テ訳語ヲ用キズ又加註セズ其ノ儘コレヲ使用セリ

三、動詞、形容詞、副詞、感詞等ニシテ文法上特別ノ説明ヲ要スベキモノ多ク尚ホ語組織ノ原理方法等ニ亘リ特ニ研究スベキモノ頗ル多キモ原ト総訳ノ目的トスル所ニ非ザルヲ以テ都テコレヲ掲ゲズ

四、問答ノ上中下各上欄ニ掲記セル名辞又ハ語句ハ訳語トノ対照ニ備フルモノニシテ多ク初見ノ語辞ノ順序ニ依リテコレヲ挙ゲタリ

五、書中欄外（ ）内ノ数字ハ本書（急就篇）ノ頁数ヲ示シ其ノ外散語篇中訳語内ノ数字ハ各語ノ順序ニ附シタル番号トス彼此対照上ノ便宜ニ備フ

六、本書ノ目的ハ原語ノ意義ヲ訳出スルノ外一面訳語ヲ按シテ原語ヲ暗誦セシムルノ用ニ

供セントスルニ在ルヲ以テ成ルヘク原語ノ語気言回シ等ヲ其ノ儘之ヲ表出センコトニ努メタリ故ニ時トシテハ邦語トシテ多少不適當ノ辞句ナキニアラスト雖真ニ已ムヲ得サルニ出ツ読者幸ニ之ヲ諒セラレンコトヲ

訳者の杉本吉五郎は、「東京外国語学校清語学科専修科第一〇回修了生で、この総訳を執筆した時は大連に在住した」（六角 1994）。例言から窺える訳述方針としては、特に二と六が重要である。

二では、二人称代名詞（対称代名詞）の訳し方として、你と您に触れている。你は「オマイ¹」や「キミ」、您是「アナタ」に相当するが、場合によって様々な訳が相応しいため、訳語を使用せず、注も付けずに、中国語をそのまま用いたと述べている。実際に、「問答之上」で対応関係を確認してみると、訳述方針の通りになっている。人称代名詞の詳細は、第6章で触れる。

六からは、中国語の暗誦に力を注いでいることが窺える。中国語の語気や言い回しを訳に出すので、日本語としては不自然なところも出てくると言っている。この訳述方針を十分踏まえた上で、この資料を利用する必要がある。どのような点が不自然なのかは、他の訳との比較も含めて考えたい。

3.3 ワア行五段動詞連用形の音便

江戸語から東京語へ移り変わる過程で、ワア行五段動詞連用形の音便は、ウ音便形・促音便形併用からウ音便形の消滅という方向へと変わっていった。飛田（1992）による『和英語林集成』（初版）の調査では、ウ音便形表記の語が77例、ウ音便形促音便形両表記の語が5例、促音便形表記の語が193例となっている。諸星（2009）による『台湾会話篇』の調査では、ウ音便3例、促音便26例であった。園田（2016）による『官話指南総訳』の調査では、ウ音便81例、促音便77例と拮抗している。

杉本『官総訳』には以下の例が見られた。

① 合フテイマスカ 合ツテイマス（官²「対不對 対」、問答上5、杉本『官総訳』）

質問にウ音便、答えに促音便を使った例である。『官話急就篇』の中国語は「対不對 対」であり、これがウ音便か促音便かに影響を与えているとは思えない。

大橋『詳訳』、打田『基礎』は以下のようにこの問答ではウ音便か促音便のどちらかに統一されている。

② 合ふ（対）て居ますか（話や時計などが） 合ふて居ます（官「対不對 対」、問答上5³、大橋『詳訳』）

③ 合つて居ますか（数とか話とか時計とかが合つてゐるかの意） 合つて居ます（官「対不對 対」、問答上5、打田『基礎』）

¹ 小松（2007）によると『日本語会話』（ブラウン）に現れるオマイとオマエは「仮名遣いが違うだけで同じ語なのではないか」としながらも、なお、「この問題については分からないことが多い」という。

² 『官話急就篇』（増訂四版以降）の略。以下同じ。

³ 文番号。

宮島『急総訳』は対応する例はなかった。別の個所で「合つて」「言つた」「買つて」「酔つて」等の促音便がある一方「云ふて」等のウ音便も見られる。

4 『官話急就篇詳訳』（大橋末彦）（大正6年刊）について

4.1 『官話急就篇詳訳』の書誌

書誌について挙げると以下の通りである。

- ・もととなった書：『官話急就篇』（増訂四版以降）
- ・書名：官話急就篇詳訳（大橋『詳訳』と略記する）
- ・著者（訳者）：大橋末彦
- ・刊年：大正6年9月
- ・発行：上山松蔵
- ・発行地：下関市
- ・売捌所：文求堂書店（東京市・下関市）
- ・序識年：大正6年5月（早稲田大学教授青柳篤恒識）
- ・自序識年：大正6年5月

構成は以下の通りである。

- ・序・自序・凡例・目次
- ・名辞・問答之上・問答之中・問答之下
- ・散語・附（家庭常話～応酬須知）

4.2 『官話急就篇詳訳』の序・自序・凡例からみる訳述方針

早稲田大学教授青柳篤恒による序がある。以下前後を略し抜萃を記す。

〈序・抜萃〉

有名なる『急就篇』は当代に於ける我邦支那語学界の恩人たる宮島大八先生の著述せられたるものである、山口高等商業学校教授大橋末彦君夙に其解釈を物するに志あり、永年の連続せる苦心を経て漸く其業を終へられたといふ、是れ誠に恩師の業を紹述せんとする美しい情誼と、一人でも多く支那語を学び得て支那に活動するに足るべき人材を造就したいといふ固き決心との結晶であると信ずる、なんと時宜に適切な事業を遂げられたものといふべきではあるまいか、

続いて、大橋自身による自序がある。

〈自序〉

本訳は著者が山口高等商業学校に於て生徒の教授上多年研究せし教案なれども這般文英堂主人の懇囑により原著者なる恩師宮島先生の允諾を得て茲に公刊することとせり、然れども著者原より浅学菲才なれば或は誤訳若くは訳語の妥当を缺くもの亦尠なからざるべし、冀くは大方先進の諸士幸に示教を垂れ給はんことを、尚ほ初学の諸士に対しては此著により各自の修学上幾分かの裨益あるを得ば著者の本懐にして最も欣幸とする所なり。

恩師宮島大八の許可を得て刊行していることが分かる。宮島がどれだけ見たかは分からないが、大橋訳と宮島訳とで相互に影響を及ぼしている可能性がある。

訳者の大橋末彦は、執筆時山口高等商業学校教授である。六角（1994）によると「明治三四年七月東京外国語学校清語学科別科を第三回生として修了した。その修了の年善隣書院に入学している。東京外国語学校と善隣書院の在学時代、『官話急就篇』の著者宮島大八に、またこの訳書の序文を書いた青柳篤恒にも教えを受けたと考えられる」という。

続いて凡例が記される。

〈凡例〉

一、本書は主として初学者に解り易からしむるために成るべく平易詳細に訳述し以て修学に便ならしむ

一、本書は読者をして但だ本文の意義を了解せしむるのみを以て足れりとせず併せて支那語応用の才を養はしむることに努力せり

一、本書は字句の訳語の外に支那の風俗習慣等の幾分を習得せしめ他日の研究資料となさしめんことを期せり

一、本書は必ず急就篇と対照熟読して始めて其の意義を了解すべきものにして本書のみにては何等の効果をも齎らすべきものにあらざるを知るべし

一、圈点を附したる訳語の下の括弧内は其訳語ノ支那語を表示し読者をして一目瞭然記憶に容易ならしむ

一、或訳語又は支那語の下部にある細字の註釈は其意義、来歴、理由他の訳語、類似の訳語に対する支那語等前後の関係によりて或は繁に或は簡に説明を加へ以て読者をして聊か支那の事情習慣をも知らしむるの助けとせり

一、或支那語にして多数の意義に解釈せらるゝ者は其各意義を表示し以て適宜応用し便ならしむ

一、名辞の部に於ては特に詳しき説明を加へ読者をして其訳語の外に多方面に亘りて新智識を与ふるに勉めたり

一、全体を通じて頁数及番号を明記しあれば若し何頁の第何番の意味の如何を知らんと欲せば其数を案じて容易に探し出し得るの便宜あり

一、訳語中普通読み難き字には一々振仮名を附して判読に便ならしめたり

一、本書訳出につきては多年山口高等商業学校に教鞭を執られつゝある恒暁峰官名峻先生の助力に待つこと亦多かりき茲に謹みて謝意を表す

凡例の初めの文は重要である。初心者に分かりやすくするため、易しく詳しく訳述したという。

4.3 訳文のバリエーションと優先順位

大橋『詳訳』では、本文のほかに割注の形で他の表現が記される。次の例では、「出かけ」が本文で優先順位が高く、「行き」「出発し」は割注なので、優先順位は低いバリエーションと考えられる。

④ 出かけ（行き・出発し）（走）ましたか 出かけました（官「走了麼 走了」、問答上2、大橋『詳訳』）

大橋『詳訳』に限らず、杉本『官総訳』、打田『基礎』も割注または注を付ける形で訳のバリエーションと順位付けを行っている。

- ⑤ 出カケ (又ハ行き) マシタカ 出カケ (行き) マシタ (官「走了麼 走了」、問答上2、杉本『官総訳』)
- ⑥ 出掛けましたか (走は走る意に非ず、行く、出発する意なり) 出掛けました (官「走了麼 走了」、問答上2、打田『基礎』)

宮島『急総訳』は次の通りである。この注として「『走』ハ出カケルナリ、行クナリ、又歩ムナリ、但シ走ルト誤ルベカラズ、又出発ト訳ス」とある。

- ⑦ 出かけましたか 出かけました (急⁴「走了麼 走了」、問答上2、宮島『急総訳』)
このように見ると、4種ともに本文が同じであっても、バリエーションの挙げ方は少しずつ異なっていることが分かる。

5 『急就篇を基礎とせる支那語独習』(打田重治郎)(大正13年刊)について

5.1 『官話急就篇総訳』の書誌

書誌について挙げると以下の通りである。

- ・もととなった書：『官話急就篇』(増訂四版以降)
- ・書名：急就篇を基礎とせる支那語独習(打田『基礎』と略記する)
- ・著者(訳者)：打田重治郎
- ・刊年：大正13年12月
- ・発行：大阪屋号書店
- ・発行地：大連市
- ・自序識年：大正10年8月
- ・自序識地：山東省青島

構成は以下の通りである。

- ・自序・例言・緒言・目次
- ・名辞・問答ノ上・問答ノ中・問答ノ下
- ・散語・家庭常話・応酬須知

5.2 『官話急就篇総訳』の自序・例言からみる訳述方針

自序は以下の通りである。

〈自序〉

明治三十九年四月余は官命を帯ひて再び南満洲に赴くや只管支那語の研究に没頭し爾來大正九年九月に至り任に山東に転するに及び益々其研究の度を進めたり此間書に就き人に質し此に索め彼に問ひ随て得れば随て録し蒐め得たる資料実に尠しとせずされと是は一面より見て散漫たる一堆の反古紙たるを思ひ他面には支那研究の途にある豚児が資料にもと其中より摘み録して物せるもの即本書なり浅学敢て自ら揣らす之を公にする所以のものは徒に衒ひ誇らんとには非ずして広く江湖に質し諸賢士の叱正を仰かんとする所以なり今完成に臨み此挙に対する恩師の慇懃なる高教と旧友の多大なる援助とを負へるを彰にし爰に謹て満腔の謝意を表す

⁴ 『急就篇』の略。以下同じ。

例言は以下の通りである。

〈例言〉

- 一、本書は始に急就篇の原文を掲げ之に支那語の真髓とも云ふべき重念を附し次に新字には羅馬字を以て発音及四声を示し説明の欄を設けて一字一句毎に詳解を施し終りに総訳をなし各章の終りに練習問題、応用問題を掲げて研究に便ならしめたり
- 一、本書の説明は力めて所有ゆる場合に応用し得らるゝを期したる為め或は専門語若くは高尚なる學術語を以てし或は解し易き俗語卑近なる方言等を以てしたりと雖も概して古今に亘り使用せられざる廢字廢句死語等に薄くし近代語流行語等に厚くせり
- 一、本書中同一文字の屢々出現することあるも発音四声は勿論其意義等総て最初に説明し再び之が説明をなさず是特に研究者をして過去学習の個所を繰返し練習せしむる意にて研究者に対し真に親切ならんとの意に出でたるなり
- 一、同一の意味にして称へ方の数種あるもの即文字の異なるものは説明欄に於て成るべく多く材料を提供すること、せり殊に訳解に於ては特に然りとす
- 一、発音の二様以上あるものは悉く之を挙げ其中最普通なるものを標記し語原の説くべきものは載せ語釈出典等を明示せんとせしも今は之を省きたり
- 一、本書中支那語に最多き捲舌音を表はすに△の略符を以てしたるは我が師恩先生独創の式を採りたるなり
- 一、本書の編纂に就き北京官話の正音を羅馬字にて表はすの法は現代最広く世に行はれつゝあるMr. Thomas Francis Wadeの方式を取り之に諸大家の研究と余自身の意見とを彼是參酌併用したり
- 一、重念を示すことは支那語研究に於ける至難中の至難なり何となれば単なる一句話にして均しく北京城内生粋の人にすら甲は上の文字に重きを置き乙は下の文字を重く読む等あればなり然るを余が敢て憶面なく発表したるは最多く耳にせし儘を記したるのみ
- 一、本書は通編の起稿浄書校訂等の総てを挙げて著者の独力に出でたるを以て固より不備の点なきに非ず此等は将来版を重ねるに従ひ大方の批正を得て漸次必ず修整する所あるべし
- 一、積文の意を悉くし難き所には図画を加へば更に妙ならんとも思へど初版は其挙に及び難し後の増補を俟つて完訂を為すことを誓ふ学者暫く諒焉
- 一、本書編纂に就ては支那人は勿論内外人の所有ゆる著書を涉獵参考し広く諸材料を蒐集したるも其主体は著者自ら経験したる實地に基けるものとす
- 一、本書は素と余が在支十有九年の間に研究蒐集したる材料にして目下商業学校に在る愚息の為に順序的に排列したるに過ぎず然るに三四有力なる旧友が切なる勸の否み難きものあり急ぎ之を梓に上したれば魯魚の誤尠からず必年所を逐ひ刪修潤色の功を積み以て完璧たらしめんとす今は唯後の重修を期せんのみ
- 一、此書は短日月の間に編纂したるものなれば発音四声は勿論重念解説等杜撰にして隔靴搔痒の感なき能はず加ふるに余淺学寡聞固と是れ文に嫻はず畢竟当初自ら辞せずして一念我が子の語学研究に鑑み妄に急いで彼が一ヶ月余の夏期休暇を利用せんとしたる親心に出でたるのみ豈推敲の暇あらんや
- 一、本書に拠り一と通り支那語の基礎を得たる篤学家は進んで更に予が近著官話指南を楷梯とする支那語研究及び華語便覽並に華語跬歩を参考とする支那語研鑽を熟読せられん

ことを乞ふ

訳者の打田重治郎は、執筆時済南居留民会書記長、前陸軍通訳官である。自序と例言から、打田は官命で、明治39年から刊年の大正13年まで、足かけ19年間中国に滞在している。この間の研究成果が盛り込まれている。商業学校在学中の息子のためにまとめたという。

訳述方針としては、例言第2項の下線部が重要である。つまり、あらゆる場合に適用できるように「専門語」や「学術語」を使い、解り易い「俗語」や卑近な「方言」を使ったという。ほとんど用いられない「死語」の類は少なくし、「近代語」や「流行語」を多くしたという。

5.3 待遇表現のバリエーション

打田『基礎』の「説明」には、以下のように述べられている。

來了麼は「来ましたか」「来られましたか」「御出になりましたか」「御見えになりましたか」と丁寧^レに云ふ場合又は「来たか」と下輩^レに向て云ふ場合にも均しく用ひらる。

先に触れた「訳のバリエーション」の一種であるが、特に待遇表現と関わるものである。大きく分けると丁寧形で言う場合と普通形で言う場合に分けられる。丁寧形を使う場合はさらに丁寧度により細かく分けられる。

他の訳を見てみよう。

- ⑧ 来マシタカ 来マシタ (官「來了麼 來了」、問答上1、杉本『官総訳』)
 - ⑨ 来ましたか (來了麼) 来ました (官「來了麼 來了」、問答上1、大橋『詳訳』)
 - ⑩ 来ましたか 来ました (急「來了麼 來了」、問答上1、宮島『急総訳』)
- 3種とも、打田『基礎』の最初に掲げられた「来ましたか」と同じになっている。

6 『急就篇総訳』(宮島大八)(昭和9年刊)について

6.1 『急就篇総訳』の書誌

書誌について挙げると以下の通りである。

- ・もとなつた書：『急就篇』
- ・書名：急就篇総訳(宮島『急総訳』と略記する)
- ・編輯者・著者(訳者)：宮島大八
- ・刊年：昭和9年7月
- ・発行：善隣書院
- ・発行地：東京市
- ・発売所：文求堂書店(東京市)

構成は以下の通りである。

- ・目次
- ・単語・問答之上・問答之中・問答之下
- ・散語・附(家庭常話～応酬須知)

6. 2 宮島大八の訳述書は中国語が先か日本語が先か

宮島大八⁵は、慶応3年10月20日、米沢藩に生まれ、昭和18年7月9日に没した。本名を吉美、字を詠士という。書家、中国語教育者として知られる。父宮島誠一郎は米沢藩士で、後に貴族院議員を務めた。大八は、幼少時、誠一郎が政府の職に就いたため家族とともに上京したので、山形生まれ東京育ちということになる。その後、明治17年には東京外国語学校を卒業している。明治20年、清国に渡り、明治27年帰国した。帰国直後の明治28年、詠婦舎を開き、中国語を指導した。詠婦舎は明治31年、善隣書院と改称される。

先にも触れたとおり、宮島大八は『官話急就篇』を作り、『急就篇』に改訂した。その本人が訳述書を出しているため、他の訳述書とは異なる位置づけと考えた方がよい。詳細な訳述方針は書かれていないので、訳述書の日本語や宮島の他の著作から推察することにもなる。

中国語が先か日本語が先かという問題は他の中国語会話書でも重要である。明治から昭和20年にかけて中国や台湾で行われた日本語教育では、日本語の本文に中国語（あるいは台湾語）の訳文を付けることが行われた。これは、日本語が先にあり中国語に訳した例とも言える。いずれにしても、今後さらに詳しく考察すべき事柄である。

6. 3 人称代名詞

人称代名詞については、近藤（2013）で『太陽コーパス』⁶全体の一人称代名詞を網羅した分析がなされている。このような先行研究との比較が可能である。

二人称代名詞については、第3章でも触れた通り、訳述方針と密接に関わっている。宮島『急総訳』には訳述方針は述べられていないが、二人称代名詞を用いない表現を多用するという特徴が見られる⁷。

① 何を見て居ますか（急「你看甚麼呢」、37、宮島『急総訳』）

② お疲れですか（急「您乏了麼」、67、宮島『急総訳』）

これに対して、杉本『官総訳』は、第3章で述べたとおり、読みを読者に任せている。

③ 你ハ何ヲ見テイマス（官「你看甚麼」、36、杉本『官総訳』）

④ 您、オ勞レデシタカ（官「您乏了麼」、70、杉本『官総訳』）

大橋『詳訳』、打田『基礎』は読みが推定できるようになっている。

⑤ 君は何を見て居ますか（官「你看甚麼」、36、大橋『詳訳』）

⑥ 貴下御疲労なさいましたか（官「您乏了麼」、70、大橋『詳訳』）

⑦ 君は何を見て居ます（官「你看甚麼」、36、打田『基礎』）

⑧ 您⁸御疲れでしたか（官「您乏了麼」、70、打田『基礎』）

このように、二人称代名詞を用いるか用いないかという点に関しては、金子（2000）に

⁵ 『現代日本 朝日人物事典』（朝日新聞社、1990）、『新訂増補 人物レファレンス事典 明治・大正・昭和（戦前）編Ⅱ』（日外アソシエーツ、2010）等の人名辞典を参照した。

⁶ 『太陽コーパス』は、当時広く読まれた雑誌『太陽』のうち、明治28（1895）年、明治34（1901）年、明治42（1909）年、大正六六（1917）年、大正14（1925）年の5箇年分全文をコーパス化したものである。

⁷ この特徴については既に板垣（2016）に指摘がある。

⁸ 打田『基礎』では、中国語「您」の日本語訳として「あなた」という平仮名表記のほかに、ルビのない「您」「貴下」「足下」という漢字表記が見られる。

おいて「直訳度」として提示されている。幕末・明治期の洋学資料の中で、ブラウンは直訳度が高く、チェンバレンは直訳度が低い。これは、英語から日本語へ訳される場合であるが、中国語から日本語に訳される場合、さらには、日本語から中国語に訳される場合にも参考になる考え方である。

宮島『急総訳』は、前述の通り、中国語が先か日本語が先か分からない部分がある。一方、確実に、日本語がもとになり、それを中国語訳したという資料もある。中国や台湾で行われた日本語教育における教科書の一部はこのような体裁を取っている。

たとえば、松本亀次郎が大正3年に刊行した『漢訳日本語会話教科書』がある。この緒言には「本書ノ日本文ハ、余主トシテ稿ヲ起シ、三矢重松、松下大三郎、小山左文二、門馬常次、臼田寿恵吉、立花頼重、乙骨三郎、館岡政次郎諸氏ノ閲正ヲ経シ者ナリ」とある。諸星（2009）では、三矢重松と台湾語会話書との関わりが述べられており、松本亀次郎を通じた日本語教育への影響関係等は興味深い。中国語の訳文に関しては、同じく緒言で、「本書ノ漢訳ハ、余嚮ニ北京ニ在リ、支那語ヲ学ブ時、我ガ師宗蔭先生ト共ニ、参酌シテ訳出セル者ナリ」という。

実際の例文を見ると、次のように、二人称代名詞は、日本語にも中国語にもあるもの、日本語にはなく中国語のみにあるものが見られる。

- ①⑨ アナタ、御掛（オカ）ケナサイ 您請坐（漢訳日本語会話教科書・3頁、教師→学生）
- ②⑩ 毎度（マイド）アリガタウゴザイマス。又（マタ）ドウゾ御願（オネガ）ヒ申（マウ）シマス 您走了。請您往後多照顧（漢訳日本語会話教科書・48頁、番頭→客）

7 まとめと今後の課題

『官話急就篇』および『急就篇』の訳述書4種（大正5年から昭和9年までに刊行）を杉本『官総訳』、大橋『詳訳』、打田『基礎』、宮島『急総訳』とし、書誌的事項を確認した。

訳述方針や著者の略歴等を詳細に見ることにより、近代日本語資料としての性質が明らかになった。待遇表現のバリエーションを含む訳文のバリエーションが本文と割注というような形で優先順位を付けられ示されていることが、資料を調査し分析することから判明した。このことにより、日中対照の中での多様な日本語の姿が窺える。ワア行五段動詞連用形の音便の例からは、訳述方針や中国語の原文にとらわれない日本語の揺れの一端が認められた。人称代名詞、中でも二人称代名詞に関しては、杉本『官総訳』のように訳述方針通り読者に読みの判断が委ねられる例が見られた。その一方で、宮島『急総訳』のように「直訳度」の低い場合も見られた。近代日本語資料としての活用法としては、幕末・明治期から昭和20年にかけて揺れのある表現についてその実態の一端を明らかにできることが挙げられる。さらには、日本語の原文とそれをもとにした中国語文が付される日本語教育の教科書との比較、あるいは、影響関係の解明という方向に発展していく。

【参考文献】

- 板垣友子 (2013) 「官話急就篇の初版と増訂版との比較」『中国言語文化学研究』二
 ——— (2016) 「官話教科書の日本語訳に関する考察—宮島大八の教本を中心に—」『日
 中語彙研究』〈愛知大学中日大辞典編纂所〉五
- 内田慶市・氷野善寛 (2016) 『官話指南の書誌的研究』好文出版
- 金子 弘 (2000) 「幕末・明治期洋学資料の例文の文体—人称代名詞の使用率と直訳度—」
 『語から文章へ』〈語から文章へ編集委員会〉
- 小松寿雄 (2007) 「幕末江戸語の一・二人称代名詞」『学苑』八〇二
- 近藤明日子 (2013) 「近代総合雑誌記事に出現する一人称代名詞の分析—単語情報付き『太
 陽コーパス』を用いて—」『近代語研究 一七』武蔵野書院
- 園田博文 (1997) 「明治初期中国語会話書の日本語—『亜細亜言語集』『総訳亜細亜言語集』
 を中心に一」『文芸研究』一四四
- (1998 a) 「中国語会話書における助動詞「です」の用法について—明治10年代を
 中心に一」『国語学研究』三七
- (1998 b) 「『参訂漢語問答篇国字解』(明治13年刊)に於ける訳語の性格—九州方
 言との関わり—」『言語科学論集』二
- (1999) 「日清韓会話書と近代日本語—形容詞丁寧形をめぐる日本語教育の基礎的
 研究—」『人文学報』〈大韓民国江陵大学校人文科学研究所〉二八
- (2002) 『語言自邇集 (COLLOQUIAL CHINESE)』訳述書の中国語と九州方言
 —会話文中における語の解釈—『佐賀大学留学生センター紀要』一
- (2005) 「中国語会話書に於ける「へ」と「に」—使い分けについての—考察—」
 『日本近代語研究 四』ひつじ書房
- (2010) 「『日清会話』と『日韓会話』(参謀本部編明治二七年八月刊)—日本語資
 料としての位置付け—」『近代語研究 一五』武蔵野書院
- (2012) 「明治28年刊台湾語会話書の植物語彙に関する—考察—『台湾語集』『台
 湾言語集』『台湾会話編』『台湾語』を中心に—」『近代語研究 一六』武
 蔵野書院
- (2016) 「『官話指南総訳』(明治三八年刊)の日本語—当為表現・ワア行五段動詞
 連用形の音便・人称代名詞を手がかりに—」『近代語研究 一九』武蔵野
 書院
- 田中章夫 (2001) 『近代日本語の文法と表現』明治書院
- 飛田良文 (1992) 『東京語成立史の研究』東京堂出版
- 諸星美智直 (2009) 「John MacGowan “A manual of the Amoy colloquial” と三矢重松・
 辻清蔵訳述『台湾会話篇』」『国語研究』七二
- 六角恒廣 (1992) 『中国語教本類集成 第二集 解題』不二出版
- (1994) 『中国語書誌』不二出版
- (2001) 『中国語関係書書目 (増補版)』不二出版

【使用資料】

『官話急就篇』（宮島大八）（明治37年刊）国会図書館蔵本（初版）

『官話急就篇』増訂四版（宮島大八）（明治39年刊）『中国語教本類集成 第二集』（不二出版）所収復刻本

『急就篇』（宮島大八）（昭和8年刊）架蔵本（昭和13年7月・26版）

『官話急就篇総訳』（杉本吉五郎）（大正5年刊）『中国語教本類集成 第二集』（不二出版）所収復刻本

『官話急就篇詳訳』（大橋末彦）（大正6年刊）『中国語教本類集成 第二集』（不二出版）所収復刻本

『急就篇を基礎とせる支那語独習』（打田重治郎）（大正13年刊）『中国語教本類集成 第二集』（不二出版）所収復刻本

『急就篇総訳』（宮島大八）（昭和9年刊）『中国語教本類集成 第二集』（不二出版）所収復刻本

『漢訳日本語会話教科書』（松本亀次郎）（大正3年刊）『松本亀次郎選集 第五卷』（冬至書房）所収復刻版（初版）

〈謝辞〉

石崎貴士先生には、英文題名および英文摘要の作成にあたり、貴重なお指摘をいただきました。記して謝意を表します。

Summary

SONODA Hirofumi

A Consideration of Four Japanese Translations of the Chinese Textbooks
Kanwa-Kyushu-Hen and *Kyushu-Hen*:
As a Glimpse of Early Modern Japanese

This paper is a report on the four Japanese translations of the *Kanwa-Kyushu-Hen* and *Kyushu-Hen* that are very famous Chinese Textbooks written by Miyajima. Through the bibliographic consideration, translation policies and procedures, and backgrounds of the author and translators, the early modern Japanese especially from Taisho to early Showa can be explained. Considering those variations based on the same original Chinese text, some common and unique aspects can be evaluated on the priorities set in translations and notes; such aspects as euphonic changes and second personal pronoun.